

[048] 語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/10224>

出版情報：語文研究. 48, 1979-12-10. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

編集後記

本号の印刷は、総選挙をはさんで多少の不安を感じていたが、どうやら順調に推移して、予定通り年内にお手許に届けることが出来そうである。ちょっとオーヴァに言えば、これで年末も心安らかに越せる、といったところだ。来年もまた、会員諸氏の力強い御支援をお願いしておきたい。

会員の支援を口にしたついでに一言——昨年から大学院生を中心とした若手会員が集って、「文献探究」と名付けた同人誌を出しはじめて、すでに五号に達した。内容についてまで述べることは、場違いなので慎しむことにするが、こうしたことは数年前まではあまり見られなかったことで、若い人たちの積極的意欲がたのもしい。

おそらく、原因は意欲だけではなく、俗なカンگریをすれば、大学院生の奨学金増額というそのフトコロぐあいも与っているかと思う。しかし、それと共に、本誌の掲載だけを当てにしているのは、論文発表のチャンスに不足するという、危機感もあるろう。

ところが一方では、その事を察して、中堅以上の会員がとかく若手に席を譲るといふ形で、投稿を遠慮されがちであるやにも聞いている。

編集部としては、もちろん本誌を若手の点数かせぎの場にしようという気は毛頭ない。あくまで良い論文を掲載する事が主眼であり、心から一般会員の力作投稿方をお願いしたい。

しかし、主旨は主旨として、現実には本誌も大学院生の論文の占める比率が近年増していることもたしかで、年配の卒業生の論文と

の調和を図る必要を感じている。

しかし、若手を育てながら、中堅級以上の方の論文も併載するには、このままの紙幅ではかなり窮屈であることも疑いない。いずれ具体策を立てて、何らかの御力添えを会員にお願いする事になるかと思う。また、会員諸氏も名案をどしどし編集部にお寄せ下さい。

本号では、大学院生二人の論文のほか、前号に引続く吉田達氏の続稿と、津田修造氏の木下長嘯子に関するもの、橋口氏の平家物語論と、先輩卒業生の投稿も三篇を得た。

なお、陳子博君は修士課程在学中の留学生である。ここ数年留学生の数が、院生・研究生を通じて漸次増加しつつあるが、この論文もそういう研究室の新しい国際的性格を端的に物語るもの、といえはいいえる。暖かい目で御覧頂きたい。

次号縮切は、昭和五十五年一月末日です。

(今井記)

昭和五十五年度九州大学国語学会総会

並びに研究発表会のお知らせ

日時 昭和五十五年六月八日(日)

場所 九州大学文学部

※研究発表希望の方は発表題目を明記のうえ、本会宛

昭和五十五年五月十日までにお申込み下さい。